令和６年４月 20 日
北関東フォーラム
於：シムックス

中斎塾　北関東フォーラム
令和６年度 第４回

先ほど朝稽古で山崎先生に棒術の型を教わりましたが、頭が固くなっているなとつくづく感じました。10 教わるとして、1 から 3 まで一生懸命やって頭に入ったと思うのですが、4・5・6 あたりになるとまるで頭に入って来ない。最後の 8・9・10 になると、最初の 1・2・3 は飛んでしまっている。30 代の若い社員は、山崎先生からやってごらんなさいと言われると、1 から 10 まで出来るのです。初めて参加した 28 歳の社員も、しっかり出来るのです。若い人は頭にすぐ染み込むのだなと感心しました。

同時に、私は年をとったのだなとつくづく感じました。それを何とかするためには、何度も何度も練習しなければならない。中斎塾フォーラムでも、同じ話を何回もする必要があるなと、今朝方思いました。

なるほど後期高齢者と言われる年代は、頭が固い。ならば、ほぐすようにすれば良いわけで、中斎塾フォーラムが頭をほぐす場になると良いなと思います。

陽明学を学ぶ

今日は陽明学についてお話をしたいと存じます。私が書いた『陽明学のすすめⅠ』を回覧致します。陽明学は王陽明という人が考え、世の中に生まれ出たわけですが、どのような経緯で陽明学と言われるようになったのか、陽明学の根本は何なのかということがこの中に書いてあります。

では、レジュメをご覧下さい。王陽明についてざっとお話をして、それから、陽明学の言葉についてお話をして参ります。今日は素読がありませんので、皆さんで陽明学の言葉を声に出して読んでみましょう。

①立志

陽明学の中で「志を立てる」とは大変重要なものです。自分の人生を如何に生きるか、を「立志」という言葉で包含しています。私はこういう人生を歩みたい！ その想いが強ければ強いほど、その志に向かって突き進んでいくことになります。例えば、中江藤樹は小さい時、私は聖人になりたいという志を立て、一生涯志に向かって突き進んだ。そして、「近江聖人」と言われるようになりました。日本で「聖人」と言われた人は大変少ないの

です。

②知行合一

「ちこうごういつ」と読みます。くれぐれも「ちぎょうごういつ」と読まないようにお願いします。

③事上磨錬

磨き練り上げるという文字です。

④四句訣

「四句教」とも言います。「訣」は秘訣ですから、四つの秘訣、或いは四つの教えという意味です。陽明学は四つの教えによって成り立つと言われています。

⑤致良知

「良知を致す」と読みます。中江藤樹は「良知に至る」と読みました。陽明学の中で言われる「知」は、「良知」又は「真知」（本物の知）という言い方をします。

陽明学の概説

まず初めに、王陽明という人についてお話します。王陽明はマイナスの人生、不幸な人生を送ったと見ても良い。視点を変えるとプラスの人生、幸せな人生だったとも言えます。王陽明自身は亡くなる時、「この心光明、また何をか言わん」と、私の人生は素晴らしい人生だったと言い残して亡くなっています。

王陽明の誕生の逸話があります。或る日、陽明のお婆さんが夢を見ました。夢の中で神様が「お前は良い行いをした。褒美に良い子を授けてやろう」と言われたので、お婆さんは「私の嫁に素晴らしい子供を授けて下さい」とお願いした。そして生まれたのが王陽明というわけです。

陽明は小さい時はわんぱく坊主、無鉄砲な子供でした。生みの親は早くに亡くなって、継母で育ちました。産みの親ではないというのが頭の中にあったのでしょう。継母に対して計り事を用いて、自分を大事にするように仕向けたという話も残っています。

「陽明の五溺」という言葉があります。陽明が大人になって一人前に活躍をする前は、自分の人生如何にと考えたわけではなく、迷いの時期でした。その間の迷いが「五溺」です。

①任侠・・・強気を挫き弱気を助けるような、男立てに憧れました。

②騎射・・・戦国時代ですから、戦乱の巷の中で、戦で名を揚げることに憧れました。ですから、体を鍛え戦の仕方も身に付けて…と武人になることに溺れました。

③辞章・・・文学・学問です。当時の中国は科挙という試験がありました。それに受かると国の中枢の官僚になり、将軍や大臣、宰相といった出世コースを歩むことになるわけです。陽明も必死になって勉強しましたが、科挙の試験に落ち続けました。とても優秀な人は、だいだい一発で受かるわけです。28 歳の時、ようやく試験に受かって中枢に出ていけるようになりました。というわけで、勉強にも惑溺をしました。

④神仙・・・摩訶不思議な術を使う仙人になりたいと思って、神仙の術を学びました。しかし、こういうことで自分の人生は良いのだろうかと思い、手を引いています。

⑤仏教・・・仏教にのめり込み、一所懸命学びましたが、これも自分のやりたいものではなないと思い、そこから朱子学に入ったわけです。

当時の中国は朱子学の考え方で進んでいましたから、科挙の試験に合格するにも朱子学を学ばなければなりません。（日本も同じで、江戸幕府は朱子学を官学としました。）陽明も必死になって朱子学を勉強しますが、朱子学では自分の心持ちにあわないと感じたわけです。

朱子学は座ってひたすら学ぶという学問の仕方です。例えば、竹について学ぶ時は、朝から晩までずっと竹を見続ける。どういう形をしているとか、なぜこの竹は出てきたのか、どういう理屈でこの竹は生まれて成長し次の竹に命を繋いでいくのか等々、竹について一所懸命考えるわけです。目に見えるものはすべて理屈が立つから、それらを自問自答してはっと悟るところまで行きなさい、という勉強の仕方が朱子学です。

陽明は必死になって竹と睨めっこをし、色々なものと睨めっこをし、このままいくと体を壊すか、氣が狂ってしまう所まで考え抜いて、結果として朱子学は駄目だと悟った。じっと座って考えていただけでは、本物にならない。やはり行動すべきだ。行動し、体験の中から物事を窮めていくべきだと考えたついたわけです。

陽明自身は「陽明学」とは言っていません。当時は、致良知の学問という考え方で広がっていきました。後世になって、王陽明が唱えた学問だから陽明学と言われるようになりました。王学と言われたり、陽明が餘姚という所で生まれたので餘姚学などとも呼ばれますが、今は陽明学という言葉に収れんされています。

陽明の生涯をざっと見ると、まず 17 歳で結婚をしています。一生懸命勉強し、28 歳でキャリアの試験に合格します。陽明は自分の能力に自信があるので、かえって周りから憎まれたというのもあるのでしょう、37 歳の時、龍場というとんでもない僻地に左遷されます。そこに放り出されたことによって、後世に「龍場の大悟」と言われる大きな悟りを得るこ

とが出来ました。それによって人生が変わり出したわけです。39 歳で都へ戻った後は、政治家としての動き、それから軍人としての動きが始まったわけです。

ちなみに、日本で王陽明が受け入れられたのは、朱子学に飽き足らない日本の武士たちが沢山いたからです。武士は文武両道が基本ですが、朱子は文の道のみで武を推奨していません。陽明は文武両道で人生を送りましたので、陽明の生き方が日本の武士たちにぴったりはまったのでしょう。陽明学でいこうと決めた人たちが、佐藤一斎（一斎は陽朱陰王と呼ばれ、入門篇で教える時は朱子学、内容が深まると陽明学を教えました）に学び、明治維新の志士として維新を成し遂げたという流れになります。陽明学よって習い覚え、磨き抜かれた人たちが、明治維新の志士になることが多かった。ですから、明治維新は陽明学によって成ったと私は捉えています。

陽明は軍人として、あっという間に功績を挙げました。時の皇帝に反旗を翻した寧王の反乱軍も、あっという間に平定するだけの実力を身につけました。

当時の中国の政権の中枢にいた人たちは、ほとんどは寧人でした。寧人とは人が功績を上げると妬み、足を引っ張るという連中です。賄賂が蔓延り、おべっかを使う者は昇進し、まともな人間は左遷されたり処刑される状況でした。ですから、大きな勢力もあっという間に平定するような実力の持ち主が政権の中枢に来たら、自分たちは追い出されるではないかということで、陽明は素晴らしい功績をあげ続けるたびに、左遷されました。左遷された場所場所で、陽明は昼は戦場で剣を振るい、夜は集まってきた部下たちに陽明学を教え、講義を聞いた部下たちは陽明学徒になっていきました。

そういう人生を送って、最後は 57 歳で反乱軍を平定し、戻ろうとする船の中で亡くなりました。以上、陽明の生涯、大雑把な経歴を申しました。

陽明の言葉

では次に先ほど読んだ陽明の言葉に参ります。

①立志

志を立てる。それも、自分の人生を決めるような志を立てねばならない、というのが陽明の考え方です。軽く思うのではない、深く真剣に思いなさいということです。ですから河井継之助などもそうですが、日本の陽明学を学んだ人たちは、志を立てた時、式台を作り供物を置いて、「自分はこう生きる」と立志式をする人がいました。

②知行合一

「知るは行うの初めにして、行うは知るの成れるがなり」と申します。体験が伴っていなければ、知っているとは言えない。これは体認という言葉を使います。体で覚えたもの、体に染み込んだものでなければ、知っているとは言えないということです。生半可に知っているのは、一知半解と言います。自分自身が体験し、体得したものでなければ、知っていると言ってはいけないとお考え下さい。

③事上磨錬

我々は普段、日常の仕事をしている。或いは家庭の中で日常生活を送っています。普段、無意識で動いている中で、揉まれ揉まれて、はっと氣がついたらレベルが上がっている。自分のやっている仕事に没入して、磨き上げ練り上げて、結果として事上磨錬の人だと言われるようになると良いですね。事上磨錬とは、自分をいかに磨き上げるかの方法だと思って下さい。

自分を磨くのですから、自分で自分を磨くための方法を考え出さなければいけません。誰から教わるというのではなくて、自分自身の行動の中から見つけ出す。塚越参事は、色々な事物を見て句を考えると言っておられました。そういう行為は事上磨錬を行っていると捉えて良いと思います。

④四句訣

陽明学では、四句訣とも四句教とも言います。陽明が弟子に授けた四つの教えです。三島中州が大正天皇（当時は皇太子殿下）に四句教を教えたことによって、日本の皇室は陽明学を学び始めたということで、四句訣が有名になりました。殿下は四句教を大層氣に入られ、是非これを書にして私に下さいと頼まれたそうです。中洲先生はたいそう喜んで、一所懸命書にしてお渡ししたという話が残っています。

回覧する本は、松川健二先生の書かれた『王陽明のことば』（明徳出版社）です。松川先生には、テキストで使っている『素読論語』のあとがきを書いて戴きました。その本の中に、四句教が書いてあります。

四句教は全て、善と悪で表現しています。簡単な言葉ですが意味が分かりにくい、そう思ってお聞き下さい。三島中洲が大正天皇に四句教を講義した際、私もよく分かりません。強いて言えば、「赤ん坊の心」だと思って下さい。赤ん坊は善も悪も考えない、無垢な心です。赤ん坊の心の中に立ち入ることは出来ないように、私もこうだと説明出来ません・・・というような説明から入ったようです。

四句訣

一、善無し悪無し、心の体・・・善もなく悪もなし、これが心の本体である。

二、善有り悪有り、意の動

三、善知り悪知る、これ良知・・・善も悪も知っている、これが良知というものである。

四、善を為し悪を去る、これ格物・・・格物とは物を正すという意味です。善（良い事）を行い、自分の心の中に悪心があれば無くすように努力する。そういう考え方を持っているかどうか。持っていれば、それは格物です。

良知にもとづき、ものを正すことを「格物致知」と言います。

四句教は、聞いた瞬間に分かるような類のものではなく、体験をしながら分かっていくものだと思っています。何か体験した時、自分の心の中はどうなのだろう？　善ありか、悪ありか？　また、私はこれによって善というものが分かったのか？　善も悪も分かったというのが今の自分かな？・・・と、自問自答する。その中でものを見ていく。

ここら辺は、聞いているだけでは分かりません。体験してもなかなか分かりません。ですから、何か大きな出来事があった時、善と悪で自問自答して自分で悟る、という内容の言葉です。聞いて分かるようなものではありません。したがって、これは念仏を唱えるしかありません。

何回か申し上げていますが、宇野精一先生は、論語を分かりやすく言うのは大変難しい。論語は学者が説明すべきものではない、と言われました。なぜならば、学者は読み方や解釈ばかりで体験がない。経営をする人間は色々な修羅場をくぐるから、体験したものが役に立つ・・・ということで、易しいことを難しく言うのは似非学者、難しいことを易しく言うのが本物の学者である。そういうふうにお考えいただくと、体験した者の中から生まれてくるものが、本物の「知」に直結を致します。

ということで、何か大きな出来事、驚天動地のような体験をした時、四句訣（「善なし 悪なし」「善あり 悪あり」「善知り 悪知り」「善を為し 悪を去る」）を呪文のように唱えてみて、どこかがピタッとはまったなら、そこを真剣に集中して考え抜いてみる。それによって四句訣が見えてきます。言い方を変えると、陽明学の教えが分かるということになります。

⑤致良知

良知も言葉で説明しただけでは分かりません。本を読んでも分かりません。分かるのは体験だけです。

陽明学研究家の林田明夫さんという方がおられます。林田さんから本を送って戴いた中に、私は良知を体験したと書かれていました。林田さんが電車の中でトイレに入った時、頭の中に緊急停止という声が鳴り響いたそうです。驚くと同時に、転倒しないように足を踏ん張った瞬間、本当に急ブレーキがかかった。その声こそ「内なる声なき声（インナーボイス）」だと書いてありました。自分の心の中にもう一人の自分がいて、もう一人の自分は、聞こえない声も聞くことが出来る。それによって自分が普段自覚できない素晴らしい知識も目覚める。そういうものを良知と理解している・・・そう私は捉えたので、先日会いに行ってきました。

私も良知という体験を何度かしています。その内容は何度かお話していますが、それを良知という言葉で言ってはおりません。

絶体絶命の境地に追い詰められて、もうどうにもならない、このままでは死ぬしかない、どう足掻いても抜け出すことが出来ない・・・どうにもならないと完全に諦めた時、良知が発動します。この大変な苦境を乗り越えるために、自分の心の奥深いところから、もう一人の自分が、（出て来いと言わなくても）噴き上がってきます。噴き上がってこないようであれば、どうにもならない所まではいっていない、まだ軽いということです。本当に諦めきって、先ほど言った「赤ん坊の心」になると生まれるとお考え下さい。赤ん坊のような心でものを考えると、良知が出てくる。それを意識的に行うには、ものを正す（格物）ことです。

ということで、良知とはギリギリに追い詰められた時、自分が意識するとしないとに関わらず発動するものです。林田さんの場合は、本人が意識していないにもかかわらず、良知が発動したと私は捉えました。

ここら辺はお分かりにならないで当たり前だと思って下さい。体験した時、そうか！ というのが見えてくる。聞いてすぐにパッと分かろうなどと、そんな虫の良い話はありません。

恒例の質問

では、恒例の質問に参ります。今年に入って約４ヶ月でお答え下さい。ズームの方もこちらからもお顔が見えますので、どうぞ手を挙げていただくと嬉しいですね。

〇良い日がずっと続いている方

〇嘘はつかなかったし、嘘をつかれていない方

〇有難うとよく言ったし、有難うとよく言われた方

皆さま手が挙がって結構ございます。

〇身体の手入れをよくやっている方

私も今、真向法にだいぶはまっておりますので、身体の手入れをよくやっていると思っています。

〇今年は自分磨きをよくやっていると思う方

これは事上磨錬です。やはり事上磨錬が自然と出来るのは良いことです。

〇昨晩眠る時、明日はよい日だったと思って寝られた方

手の挙がる方が少しずつ増えています。眠る直前、明日のことを良い日だったと過去形で思えるようになったら、大金持ちまでいかなくてもお金が貯まってくるようです。

令和６年を考える

お時間が少なくなりました。テーマについて、「縦の学び・横の知識」、「嘘があふれる世の中」、「我が信条」をひとまとめにして申します。

今日は陽明学についての話でしたので、『陽明学のすすめⅠ』を久しぶりに読み返しました。この本は、平成 17 年に書いておりますので、もう 20 年近く経ちます。

この本の中で、『年金が消える』という本について紹介し、「国というのは非常に得をしている存在だ。なぜならば国は嘘をついても逮捕されない」と書いていました。

年金は、最初は積立方式で始めたわけです。あなたが積み立てたお金は利息もつけて全てあなたに年金でお返しをします・・・という説明でした。それがいつの間にか途中で変わりました。積み立てたお金がなくなってしまったから、あなたの子供や孫に強制的に加入して貰い、そのお金であなたに支払います・・・という説明もなく賦課方式になりました。これを民間の保険会社がやったらどうなのでしょう。詐欺で逮捕されませんか？ 国がやったから訴えられていません。不思議な話です。

コロナワクチンも以前の三種混合ワクチンと同じように、裁判が始まりました。政府が勧めるから、ワクチン接種をした。そうしたら、ワクチンを打った御主人が死んでしまった。政府は責任とってもらいたい・・・という裁判を起こしたご婦人がいます。こういった裁判がこれからどんどん増えると思います。

ということで、政府は嘘をつくのです。年金などは明らかな嘘です。私の本には、「国は明らかに詐欺行為をしていると思うが、『年金が消える』という本には、欺瞞と書いてあった。なんとも日本語とは便利なもので、政府がやると欺瞞と言葉を誤魔化す」と書いてありました。

今は嘘があふれる世の中です。国が嘘をつきます。そして国家は、嘘をつくことを戦争の武器にしています。戦争仕掛ける時、中国は三戦という戦略をもって、嘘をその国中に

ばら撒くわけです。ロシアも同じです。嘘がばら撒かれた結果、氣がついたら目の前に戦車があった、という戦争を仕掛けています。

嘘が溢れる世の中の今を生き抜くためには、嘘を嘘だと見抜く手段を身に付けなければなりません。そのためには、「我が信条」つまり自分の背中を押す自分の判断基準が要ります。王陽明はその判断基準を「良知」と名付けたわけです。判断基準を身に付けたなら、大したものです。

したがって私は、王陽明が生み出した陽明学を信じています。なぜならば、自分自身の判断基準を私は信じているからです。自分の信じている判断基準を、陽明は「良知」と表現したのだと理解しています。

ですから我々が今この時間、頭の中に入れておかねばならないものは、自分自身が信じ切れる判断基準を持っているかどうかです。持っていないと思ったなら、真剣に学ぶことです。

学ぶには、佐藤一斎の言う、「天地自然を師匠にするか、信じきれる人物を師匠にするか、信じきれる書物を見出すか」そのいずれかです。そう申し上げて本日の講話は終了に致します。大変有難うございました。